

このひと



株式会社イージェット代表取締役

しま だ たえ こ
島田 妙子さん

どんどん変わっていった父の人相

児童虐待の早期発見、早期対応への取組みが進められている。2004年の児童虐待防止法改正により、地域住民に対しても児童相談所への通告が義務化された。その意義は認めつつも、島田妙子さんは「それでは虐待は減らせない」と話す。島田さん自身の壮絶な体験に基づいた実感である。

4歳の時に両親が離婚、二人の兄とともに児童養護施設に入所した。小学2年の時、再婚した父が迎えに来る。継母は22歳だった。「今思えば、いきなり年子の三人きょうだいの母親になるなんて無理な話ですよね」。すぐに育児ストレスを抱えるようになった継母は子どもたちに暴力をふるい、父を責めた。やがて優しくかった父も虐待に加わる。「どんどん父の人相が変わっていったのが今でも忘れられません」。

悪いとわかっていて抜け出せない苦しさ

一方で、親たちが暴力をふるいながら子どもの目をまっすぐに見られないことにも気付いていた。「いけないことをしているってわかってるんです。だから子どものまなざしを敏感に感じて、さらに暴力で抑えつけようとするんですね」。虐待が周囲に気付かれそうになると引越したのも後ろめたさの表れだったのだろう。

島田さんが中学2年になった時、虐待に気付いた担任が父親に「いくら親でもアカンもんはアカン」と言い切り保護されたことで、7年に及ぶ虐待は「一瞬で終わりました」。その後、両親は離婚。父は謝罪の言葉を残して自死し、継母は荒れた生活の果てに

虐待する親の苦しさを 受け止め、「責める」から 「助ける」へ



一人で亡くなった。「虐待は親にとっても苦しくてたまらないものなんです」。

だからこそ、島田さんは「親の心を助ける」という形での虐待防止に取り組む。虐待をしている親に「虐待さん、いらっしやい」と呼びかける。「悪いとわかっているのに抜け出せなくて苦しんでいる人を責めたら、心を閉ざされてしまう。まずはつながらないと」。

しんどさを受け止め、経験を生かす道をつくる

講演後、「私、虐待してるんです」と告白してきた人に、「大変やったなあ」とねぎらう。そして「子どもを叩くってパワーいるよね。しんどかったね。これからはそのしんどい経験を活かして、一緒にほかの“虐待さん”を助けていこう」と語りかける。「みんな驚きますよ。“え?こんな私が誰かを助けられるの?”って。責められまいと虚勢を張ったり支援を拒否したりしていても、内心では誰よりも自分で自分を責めているんです。だから“あなたにもすばらしい力があるんだよ”と伝えることが、虐待を止める第一歩なんです」。

もちろん人はそう簡単には変わらない。しかし虐待から救ってくれた中学時代の担任は当時27歳で産休明けだったが、毅然と校長や教頭にも意見してくれた。そんな大人が一人でもいれば状況は変えられる。「私もその一人になることで、あの経験を生かせますから」。映像制作会社の経営と3人の子どもの子育て、そして夫の母の介護をしながら、講演活動やインターネットでのメッセージの発信、悩む親たちとの交流に力を注いでいる。